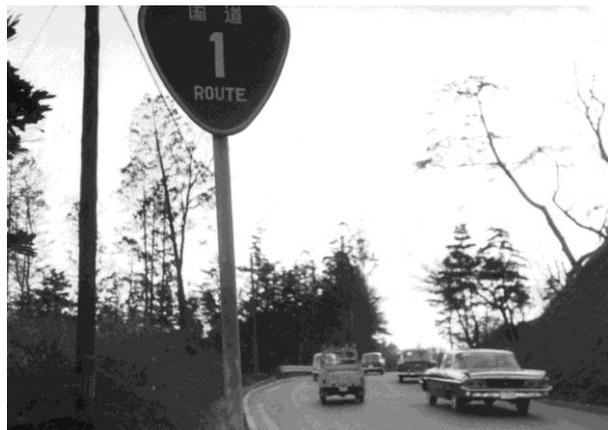


一宿一飯の恩義

浜田 豊（昭和 45 年 政治経済学部卒）

毎年のことながら、暑い夏がやって来るといつも思い出す。
東京から鹿児島までの約 2000km を一人で二ヶ月掛けて歩いて行った日々のが、まるで走馬灯のように蘇ってくる。



それは私が 21 歳の時、大学 3 年生の夏のことだった。

日本橋を出発した 8 月 5 日、あの日も酷い暑さだった…。雲ひとつ無いカンカン照りの第二京浜国道…炎のような日差しの中で重いリュックが肩に押し掛かり、道路のアスファルトからの熱気でふらふらになって、熱射病寸前の朦朧状態で歩いていた時のことを思うと、つい昨日の

炎天下の国道 1 号線（東海道）戸塚の松並木付近 ことのように感じてしまう。

「こんな事をあと二ヶ月も続けるのか…」と思うと気分が滅入ってしまい、気持ちを立て直すのが大変だった。「先の事を考えるのは止そう。毎日毎日、一歩ずつ着実に歩いて行こう」…こう思って何度気分をリセットしたことか…。

毎日の物語は山ほどあるけれど、早や二日目には生まれて初めての不思議な体験をした。忘れもしない、それは小田原での不思議な出会いだった。

その二日目の朝は藤沢ユースホテルである。

ホテルの朝は規則正しい。6時半頃には起床、そして朝食。8時45分には、今日の目的地「小田原」へ向けて出発だ。

今日は二日目なので、昨日の疲れが重なってキツイはず…。朝起きてから足のマッサージをしたけれど、まだ痛みが取り切れていない。「でも、行くしかないな…」静かにホテルの玄関を出た。小田原までは 35km もある。

ここ藤沢と言え、街道沿いの遊行寺が有名だ。

境内に入ると、寺の本堂が凄く大きい。それもその筈…この遊行寺は時宗の総本山なのである。「開祖は吞海上人、室町時代の応永年間に建立された…」と書かれている。概ね 1400 年前後だろう。

遊行寺を出てから、道は茅ヶ崎、平塚、大磯、国府津と続く。国道 1 号線、昔の東海道である。国府津は小田原のちょっと手前で、ここで国鉄・東海道線から御殿場線

が分れている。1968年当時は未だ日本国有鉄道だった。

茅ヶ崎付近の松並木は、凄〜く感じが良い。そして大磯の吉田邸を過ぎてからは、街道を外れて大磯海岸に出てみた。海が黒くドブ臭い。環境問題が社会問題化される前だったから、この状態が常であった。でも釣糸を垂れている人がいた。

「何を釣ってるんですか…？」

「キスだよ…でも釣れないねえ…フグばかりだ！」

その釣糸には小さなフグがよく掛っていた。釣人は、それを外してどんどん海に戻っていた。

今日は足が疲れて、歩くペースが落ちている。でも自分のペースで好きなように進んでいるから、気分的には然程疲れない。

途中でトラックの運ちゃんが「乗って行け！」と声を掛けてくれた。

「ありがとうございます…でも歩きだけと決めているので…」と、感謝を込めて丁重に辞退した。しかし止って声を掛けてくれるだけで、とても嬉しい。その気持がとてもありがたかった。

一方、逆に東京へ向って行く自転車旅行の若者とも何回か擦れ違った。

自転車旅行をしている何人もの若者達…その都度手を上げると、それだけで何か通じ合うものを感じる。「不思議な感覚だなあ」と思ったものだ。

太陽が西に傾いてきた。

さて、今晚はどこへ泊まろうか…？

予め旅館は予約していないので探さなければならない。でも徒歩だけだから、そんなに簡単に宿と巡り合う訳でもない。小田原にはユースホステルが無かった。これから先、まだ二ヶ月もある。予備で持ってきたおカネはあるけれど、遣ってしまったら最後が悲惨だ。まだ旅の始まり…ここは節約しなければ…。

そこで国府津にある道沿いの小学校の門を叩いた。

応対に出てきた先生は、暫くして戻ってきてから申し訳無さそうに言った。

「残念だけど、小田原市の教育委員会がダメだと言っているので泊めることができません。他を当ってみて下さい…。」

さあ、どうしよう…またトボトボと当ても無く歩き始めた。

小田原とは逆方向に歩いてしまったようだ。

暫く歩くと野球場が見つかった。そこのベンチには誰もいない。

「そうだ、今日はここで野宿をするか…。」
初めての野宿…一体どうなるのか…やはり不安は隠せない。

リュックを下して一休みしていると、黒い雲が湧いてきて「ゴロゴロッ」と雷鳴が聴こえてきた。

「雷雨じゃ仕方ないな…すわ撤収だっ！」…再び鴨宮の方へ歩き始めた。雨は激しく降ってくるし、時間はどんどん過ぎて行く。周りは雷雲で暗くなってしまい、一段と心細くなる。

そうこうしている内に小田原市街に入ってきた。車道の両脇は広い歩道が続いていた。雷雲で空が暗く、もう街路灯も点いていたが人通りは疎らだった。

トボトボ歩いていると、背後に車が近づいてくる気配を感じた。チラッと視線を向けると、黒塗りの高級車だ。そして車はボクの傍に止った。車内を見ると、どうもやくざ風の人達だった。

運転手と前席は若い男、後部座席には貫禄のあるおじさんが座っていた。…と言うことは、後の人は親分、前の二人は子分なのだろうか…。

おじさんがボクに声を掛けてきた。
「なぜ声を掛けてきたんだろう？」…それはきっと雨に濡れて、リュックを背負って、小さな傘ひとつで歩いていたからなのだろう…。

「こんな雨の中を何してるんだ…！」

「ボクは学生で、夏休みを利用して、東京から徒歩の旅をしている所です。鹿児島まで歩いて行く途中で、お巡りさんに訊いて宿を探しているんです。」

「……………」

一瞬、間を置いてから、そのおじさん 即ち親分が言った。

「学生さん、気に入ったよ！ 今夜はオレの家に泊めてやるから、車に乗れ！」

「全行程、歩きだけと決めているので、車には乗れないんです！」

「……………」

それを聞いた親分、少し考えてからこう言った。

「それなら明日、ここに車で乗せてきてやる。そうすれば全部歩いたことになるだろ？」

「… …」 私は一瞬あれこれと考えてしまった。

でも、宿は見つかりそうにもないし… … …
そんなことで、「宜しくお願い致します。」と挨拶して、結局親分の好意に甘えることにした。

親分の家に着いてから、二人の子分が銭湯に連れて行ってくれた。
やくざ風といっても、話をしているとごくごく普通の人たち、そして凄く親切な兄貴といった所だ。親分も親切だった。夕食もご馳走してくれた。

「後でお礼の手紙を書くにも、住所と名前を訊かなければ…」
そう思って親分の名前を伺ったら、「〇〇だ！」という返事。おじさんは「〇〇さん」という親分かあ…。

続けて親分曰く…「オレ達はヤクザ、町のダニだ！」

そうは言われても、このように接していると全くそうは思えない。人間は…職業だけでは分からないな。心の内と外では大分違うんじゃないかな…とも思ったものだ。有り余る親切に気持悪くなる程だったが、今夜は一宿一飯の恩義に与ることにした。

そして不思議な一夜が明けて朝を迎えた。
奥さんが朝早く起きて焼飯を作ってくれた。それをありがたく頂いてから、8時15分、箱根に向かって出発。その黒塗りの高級車で、昨日拾ってくれた場所まで親分が送ってくれた。



「本当に何から何まで、ありがとうございました。」
親分に別れの挨拶をしてから、一路箱根に向かって歩き出した。

知らない人の家に泊まるのも、このような人達と親しく接するのも、何もかもが初めての体験だった。昨日からのことを思って、人の親切に深く感動している。

私たちは他人の話や新聞などで物事の良し悪しを判断しがちであるが、直接相手と接してみて自分で

判断する事が如何に大切であるかを身をもって感じたものだ。

旅の途中でお世話になった多くの方々、友人、家族の支えによって、10月6日、鹿兒島は薩摩半島最南端の長崎鼻灯台に無事到着できた。

旅では沢山の出会いがあり、貴重な人生勉強をさせて頂いた。そして皆さんのお付き合いも半世紀に亘って続き、それらの交友関係は私の人生をとても豊かなものにした。

これは1968年当時の話なので「社会環境が異なるから、今ではどうなのか…」とも思うが、暑い夏がやってくる度にいつも思い出す。そして、お世話になった人達を思い浮かべながら、改めて感謝の気持を送っている。